

《研究ノート》

福沢諭吉のエッカルト『近代ロシア』大略

— 原典探察 —

樋口辰雄

「今改進世界の人民が思想通達の利器〔特に郵便、印刷を指す〕を得たるは人体頓に羽翼を生ずるものに異ならず。千七百年代の人民は芋虫にして、八百年代の人胡蝶なり。芋虫を御するの制度習慣を以て胡蝶を制せんとするは亦難からずや。……人事の相互に抵抗する其趣は器械学の理に異ならずして、甲の力百を以て乙を犯せば乙も亦百を以て之に応ずるを法す。手を以て人の頭を打つは頭を以て手を打たるゝに等し。之を打つ劇しきは即ち打たるゝの劇しきなり。故に政府にても人民にても、其勢力次第に盛にして一方を圧すること次第に劇しければ一方より之に応ずるの働も亦次第に劇しからざるを得ず」。これは、46歳の折、『民情一新』（明治12年：1879）において福沢諭吉が残した一文である。福沢諭吉といえば、『学問のすゝめ』や『文明論之概略』（1875年）がわが国で最も親しく読まれてきた著作であろう。この『概略』をもって福沢思想の「原理論」である、とする捉え方が丸山真男氏の立場である（『「文明論之概略」を読む』下）。これに対し、『民情一新』なる小著の方は「新たな原理論を含む未完の作品」とされた。はたして福沢という思想全体の中で『民情一新』はどのような位置を占めるのか。また、この「小著」第4章で、福沢が要約を施したエッカルトの著作やそこでの社会主義の動向に関する叙述の紹介は、単に自説を補強するための一素材でしかないのか。それとも、自由民権運動に係わる福沢の周辺にいる

若い教員達を意識しつつ（竹田行之「この痛快なる人・書物」紹介『城泉太郎著作集』）——この中で、明治一桁年のなかば、長岡藩出身で河井継之助の親戚にあたる青年・城が、既に共和主義と社会主義を論じていた、との指摘がなされている）、エッカルトを介して刻印されたモーメントが、それ以後の思想的「山脈」の重要な一つの問題領域として、『時事新報』その他の著作において存在し続けたのか（その際、「人心の騒乱」と「不平」が、『概略』と『民情一新』とを架橋するキー概念となろうが、後年、後者の「不平」の淵源を福沢は二つ分類し、「政治上の不平」と「社会上の不平」とした。社会上、経済上の「不平」（＝「貧富平均の説」）は「胃の腑」から発し、一応これを満たしてやればこの不平は止む（但し「一応」であって、この人間の「慾情」、ヴェーバー的な「欲望」充足形式は、無限に昂進する）。これに対し、「脳」に由来する「政治上の」「不平」は、その「感情」故に、いつなごき「火薬の爆裂」と化するか予測不可能だと、甚だ物騒な一節を書き残している。「人心の不平」「不平破裂の時機」「政治上の不平を如何す可きや」、1897年3月6、7、9日『時事新報』「社説」。「貧富平均論」であれ「政治上の不平」であれ、将来、社会が直面するを免れぬ「大變」と把握しているのである。「時事論」へと通底してゆく福沢のパースペクティブの腑分け、これが今後の一課題となろう）。『福翁自伝』などで語り継がれて来た

温厚なる福沢像と『民情一新』前後に伺われる福沢実像とは、はたして整合的なのかどうか。近年刊行が開始された『福澤論吉著作集』で、この小著を度外に置いていることは、どう考えたらよいのであろうか。

以上のような点を考慮する場合に、福澤論吉が『民情一新』を書き上げる際、丹念に読み込んだエッカルトの著作そのものに何か手掛かりとなるようなものはないのか。それを探ってみることが、ここでの目的である。以下では、本小著に関する研究の手始めとして、まず、『民情一新』第4章で要約した福沢の文を幾つかに分けたものを掲げ、次いで、これに対応するエッカルトの原文をその原書から抜き出し、これらを相互に対照化する作業がなされている。エッカルトの著書名は次の通りである。MODERN RUSSIA : COMPRISNG ; RUSSIA UNDER ALEXANDER II. RUSSIAN COMMUNISM. THE GREEK ORTHODOX CHURCH AND ITS SECTS. THE BALTIC PROVINCES OF RUSSIA. By Dr. JULIUS ECKARDT, LONDON, 1870. 本書の内容は、「アレクサンドル2世治下のロシア」「ロシア共産主義」「ギリシア正教会とその諸教派」「ロシアのバルト海沿岸諸地域」の4部で構成されている。福沢が「エカルド氏著、魯西亞近世史」として紹介しているものを、以下では、J. エッカルト『近代ロシア』と受けとめた。「エカルド」の正式名称は、ユリウス・ヴィルヘルム・アルベルト・フォン・エッカルト(1838-1908)である。福沢の要約は、全4部の内、第1部「アレクサンドル2世治下のロシア」に集中しており、従って、この叙述を中心にして対照化してある。分割された節によっては、要約箇所と関連する原書の原文の方が、福沢のものよりやや長目に記載しているものもある。ただそれは本研究者の力量不足もあるが、あくまで凝縮された福沢の

要約の巧みさとロシアに関するエッカルトの臨場感を理解してもらう企図に基づくものであって、別段他意はない。尚、(1)福沢の原文の漢字は新字体に直した。末尾の『全』『選』はそれぞれ、『民情一新』が所載されている『福澤論吉全集』第5巻(岩波書店、1959年)、『福澤論吉選集』第4巻(同、1981年)である。〔 〕で補充された語句は、引用者によるものである。(2)エッカルトの原文中にみえる／印の斜線は、原文が切れていることを意味する。原文の末尾の数字は、原書の頁数である。また、対照作業から得たコメントを付け加えた(これを基にした『民情一新』に関する、ないし近時文明の「デーモン」(丸山真男)に関する考察は、別の折にでも公にしたい。福澤論吉と「ロシア共産主義」ないし〔初期〕社会主義というテーマは、20世紀の福沢研究が積み残してきた重要なテーマであったように思われる)。

「千八百七十年英国刊行「エカルド」氏所著の魯西亞近世史を見るに、魯国の文明開化は「ペイトル」大帝以来未だ内地に及ばず、唯西方諸国に面する部分のみ西方文明の風に従ひ、内地に於ては依然旧套の専制を以て人民を御し大なる風波もなかりしが、千八百二十五年より千八百五十五年に至るまで「ニコラス」帝在位の間に俄に此専制の勢力を増し、千八百四十八年より千八百五十四年の間に新法を立て、日耳曼〔ドイツ〕、仏蘭西、英吉利〔いぎりす〕の良書を読むを禁じ、其雑誌新聞紙を見るを禁じ、国帝の直許を得て五百「ルーブル」の金を払ふ者に非ざれば外国に行くを禁じ、外国の技術家及び学生の来て国内の偏郷に入るを禁じ、又国中大学校の生徒は各校三百名以上の入校を禁じ、有名なる論説及び学校読本を読むを禁じ、理論学を教へ普通法律を講ずるの業を禁じ、都て学校の生徒は兵学校の生徒と見做して尋常の學術

技芸は帝の好まざる所なり云々とあるは、未曾有の専制と云ふ可し。然り而して此帝は天性豪気正直質朴なる者にして、仮令ひ其専制は帝家遺伝の風なるも、心情の剛柔に至ては之を「ペイトル」大帝に比して甚しき差違あるの証を見ず。然るに大帝は頻に西方上国〔英仏日耳曼等の諸国を云ふ〕の文明を慕ひ、其物を採用し其学士を招き、自国の人に強ひて外国に遊歴せしむる等、当時の事跡を見れば上国日新の文化を欽慕して措く能はざる者の如くなりしに、「ニコラス」帝に至ては全く之に反対し文明を見ること敵の如くなるは何ぞや。蓋し偶然に非ず、保守進取の両義相衝撞〔しょうとう〕したるものなり。千六百年代の「ペイトル」大帝は人民を進取に導たる者にして、千八百年代の「ニコラス」帝は人民の進取に困却したる者なり。人事自然の勢なれども、其衝撞の結末如何に至ては之を知る可らず。左に同書中の大意を訳して当時の形勢を示さん。」（『全』33-34頁、『選』291-292頁）

Since the Hungarian war, no mention was even ventured on of a further extension of the net of railroads; the strictness of the separation from other countries, and from all that was imported from them, became more rigid; and every advance in foreign intercourse was treated as an evil. The well known facts; that the prohibitive system during the years 1848 to 1854 overpassed the vast limits appointed it by Cancrin; that the power of the censor laid its ban upon almost all the more distinguished productions of German, French, and English literature, and on 90 per cent of all the organs of the west-Europaan (European) press; that travelling abroad was possible only by direct permission from the emperor,

and by the payment of a sum of 500 Rubles; that foreign artists and scholars had to contend with the greatest difficulties, in order to penetrate into the thinly populated empire, which so urgently needed them: / Not only, in the years 1849 and 1850, was the number of the students in the Russ universities limited to 300 in each, and the universities tutors prohibited from following the progress, which science or art was making in the rest of Europe; not only were the most famous compendiums and school-books forbidden, and the professorships of philosophy, and of general public law, abolished; not only were academical bodies no longer led by self-elected rectors, but by officials appointed by the emperor; while students were treated as cadets, and condemned to learn by heart papers confirmed by the ministers; /It is well-known that the Emperor made no concealment of his contempt for the arts and sciences of peace, but that he manifested his aversion with military rudeness. (pp.7-8.)

（「外国の技術家及び学生」は、上記のように、foreign artists and scholarsであることから、むしろ外国からやって来る芸術家、とりわけ画家そして学者たち、であると思われる。何時までも農民を「芋虫」状態に留めたいと願う皇帝ツァールは、国内の貧しさが描写されたため、無闇に学問の対象にされることを危惧したのである。「理論学」「普通法律」は各、「哲学」「一般公法」の意である）。

「前略、此時に当て「モスコウ」及び「ペイトルスボルフ」の書生輩、漸く上国の新説を伝聞して之を悦び、三十年來英佛日耳曼に発兌し

たる新版の諸書を購ふて私に之を読み、就中「ホ布斯」「フヲグト・ボックル」「ダーウキン」「ベンザム」「リュージ」「スチュアルト・ミル」「ロイスブランク」等、諸大家の明説卓論に逢へば大に感なきを得ず。天地間に人間社会は魯国のみと思ひ、政府は唯魯政府のみと思ひしに、豈計らんや、国境一帯の山を踰〔こ〕へ一葦の水を渡れば文明の別乾坤を開て、別に政府あり又人民あり、然も其人民は固有の権理なる者を持張して人事の秩序自から紊れざるものありとは亦奇ならずや、唯奇と称す可きものに非ず、亦美ならずや、彼れも人なり我も人なり、我れは其美を取て之に倣〔なら〕はんとて、其状恰も曉鐘夢を破るが如く春雷蟄を啓くが如く、復た蠢爾として旧乾坤に棲息す可らず、世上の物論漸く沸騰せんとする其際に当て、千八百五十五年「ニコラス」帝（ソ）して今帝第二世「アレキサンドル」立つ。（『全』34頁、『選』292頁）

Western Europe had been, so to speak, newly discovered, since the death of the Emperor Nicolas. The results of modern natural science, constitutional public law, the more modern sections of Russ history, the history of the revolutions of 1848 and 1849, critical philosophy, and national economy: all this was new to the greater part of the Russian public. To recover from this neglect, appeared to the liberal Russ journalists their main task; besides the translations of popular novels, which had formerly constituted the principal contents of the bulky reviews published in Moscow and St. Petersburg, they contained a bridgements and extracts of the greater number of all the scientific and political works that had appeared in Germany, France, and England,

during the past 30 years, works which had been forbidden under the old regime. Socialist and communist writings of course took the lead, but regard was paid to everything which could lay any claim to liberal sentiments. We may conceive the effect, which sudden acquaintance with Hobbes and Vogt Buckle and Darwin, Bentham and Ruge, John Stuart Mill and Louis Blanc, and others, must have had on a public, accustomed, not only to have its actions and omissions, but also its opinions and thoughts, prescribed by the government; and which had scarcely had an idea, that there were states on the other side of the frontier, in which the power of the sovereign was limited by the rights of the citizens, and in which nevertheless law, and order prevailed. (pp. 51—52.)

（原文から「フヲグト・ボックル」が二人の人物だと判断するのは困難である。フヲグトは、ゲルツェンの友であり、マルクスに叩かれた民主主義者・K. フォークト〔1817—1895〕、ボックルは、『イングランド文明史』を物した例のH. T. バックル〔1821—1862〕である。安西敏三「バックルの顔」『福澤手帖』115、福澤論吉協会、2002年、1—4頁、参照）。

「是れより先き「モスコウ」府の学士に「ヘルズン」なる者あり。該府書生党の巨魁にして魯国社会党の元祖なり。此学士嘗て政治の事に付き些細の得失を談じたるが為に、先帝の忌諱に触れ罪を得て禁固せられたりしが、事に託して伊太里〔いたりや〕に行き遂に英国龍動〔ロンドン〕府に走て復た帰らず。同府に於て出版の一局を開き、毎週雑誌を発兌して其表題を「コロコル」と名く。「コロコル」は魯語半鐘の義にして、蓋し人民を警しむるの意ならん。新

帝即位の初に一編の論説を「コロコル」に記したる其文体は、「ニコラス」の相続人たる「アレキサンドル」帝に贈る書簡にして、痛く前代諸帝の処置を咎め、独裁の政を恣にして下万民を窘〔くる〕しめ時勢に戻りて人民自由の大義を妨げたるは畢竟前代の罪なれば、其相続人たる今帝は此罪を贖はざる可らず、其贖罪の爲にとて様々の所望を述べ、就中奴隸の法を即時に廃す可しとて、恐れ憚る所もなく公然として魯国専制の治風を攻撃したるものなり。此一編の雑誌世に出てより日ならずして「ヘルズン」の名声は欧羅巴〔ヨーロッパ〕全州に轟き、貴賤上下の人民争て「コロコル」を購ひ、奮〔ただ〕に学者士君子の之を悦ぶのみならず、苟〔いやしく〕も字を知る者なれば伝へ又伝へて其名を記せざる者なきに至れり。他邦に於て斯の如し、其本国の景況推して知る可し。幾千万の群民始て政治自由の題目を聞き、之に驚き之を悦び、之を称賛し之に心酔して余念あることなし。誌中に記す所は毫も疑を容れず、恰〔あたか〕も唯命是從ふ者の如くにして、今日記者の言を以て人心を左右する其有様は、昔年「ニコラス」帝が政権を以て全国を威服したるの勢に異ならず。」(『全』34-35頁、『選』292-293頁)

The signal, for the universal desire after greater freedom of the press, had been given by that Alexander Herzen; whom we know, as leader of an active student-party at Moscow, and as the founder of the Russian Socialist school. /a harmless expression dropped by Herzen, who, removed as he was from all politics, was living only in the happiness of his recent marriage, was conveyed to the emperor, who had known Herzen's name in Moscow, and was sufficient to remove him to Novgorod, and to restrict

him from all free movement. /With the help of the noble friends and relatives of his father, Herzen obtained a passport to travel abroad; under the pretext of accompanying his delicate wife to Italy, in the year 1847 he quitted his country for ever. In Paris, which he visited soon after the February revolution, Herzen entered into close alliance with the leaders of the socialist party: /After the triumph of the reaction, Herzen, (whom the sinking of a French steam-vessel on the Mediterranean had deprived in one day of mother, wife, and children;) went to London, where a circle of Russian emigrants gather round him. It was during the latter years of the Eastern war, that he established his free Russian printing-house, in order to exert an influence on the minds of his countrymen. /he published in his newly-established weekly journal, 'Kolokol' (the Bell), a letter addressed to Alexander II., which made a noise throughout Europe, and became in Russia an event of the first moment. Within a few weeks his name, hitherto but little known, was on every lip; his journal was in the hands of all educated persons, and soon afterwards of all who could read at all. /he demanded, from the son of Nicolas, atonement for the misery which his fathers had brought on an entire people, a complete breach with the ruthless system of universal servitude and recklessness, accordance with the liberal ideas of the time, and above all immediate abolition of serfdom, as an earnest of all future agreement between people and ruler. /That this was

the man, round whom the whole nation was to gather, was at once indubitably established for all Russian patriots; and millions of men, who had never heard anything of the nature of political freedom, yielded tacitly to the leadership of a politician, who was soon to rule as absolutely, as the Emperor Nicholas had done before. (pp.39-42.)

「魯政府に於ては嚴に此雑誌の輸入売買を禁じ、「ヘルズン」の姓名を記すことも許さず、甚しきは計略を設けて、「ヘルズン」なる者は既に死亡して此世に在らずとまでに論告したることもあれども、嘗て人心の運動を止るに足らず、全国到る處として「コロコル」を見ざるはなし。千八百五十九年「ノウゴロット」の市に於て一時に十万の部数を没入したることあり。他推して知る可し。蓋し此部数は海面より来らずして亞細亜の陸地より入たるものと云ふ。又此雑誌には通信の者甚だ多くして、魯国の四隅より中心の首府に至るまで、凡そ政治上の事情は一として発兌の本局に通ぜざるものなし。廟堂の極秘密にして貴要の大臣数名の外に洩るゝの路なきものにも、「コロコル」の本局には早く既に之を探偵し得て公然紙上に記し、以て政府の耳目を驚かすもの少なからず。「コロコル」の一挙以て魯国長夜の眠を驚破してより、人民は恰も狂するが如く眩するが如くにして、有志者と称するものは皆他事を捨てゝ雑誌新聞紙の発兌を試み、千八百五十八年より千八百六十年に至るまで新に局を開て出版したるもの七十七種、此内五十は「ペイトルスボルフ」に、十五は「モスコー」に、其余十種は他の都邑にあるものなり。各社互に其盛大を争ひ其自由主義の論鋒を競ふて之がため記者を雇ふに金を愛[を]しまず。「ペイトルスボルフ」の富豪「ベスボロトコ」氏は、毎週雑誌の草稿一葉の価百

「ルーブル」を以て名文を募り、「モスコー」の学士「カトコフ」氏は月誌出版の局を買ふが為めに私立の学校を廃したり。又政府の出版検査局に出仕せんとする者も甚だ少なからず。蓋し一般の人心自由を唱るの時節なれば亦自由を以て名誉を得んとするの人情にて、検査局に出仕して出版の免許を寛大にすれば、自から当世流行の人品にして、政府を恐れざるの名を得なければなり。故に従前は人々皆この局の責に当るを恐れて出仕を避けたる者、今日は却て之を悦び、家産に豊なる平民又は扶助の年金を受る散官の輩は皆これを希望せざる者なし。亦是れ一時の侠客風に出たるものならん。或は出版検査の事に付き、自由寛大に失して免職し家に産なき者あれば、周旋人の協議にて之を補助するの風を成し、「モスコー」府の「クローズ」氏の如きは此補助を得て却て富を致したりと云ふ。魯国の自由説は殆ど一時の流行病の如くにして其勢力次第に蔓延し、政府に於ても之を如何とす可らず。」(『全』35-36頁、『選』293-295頁)

(「人心の運動」に注目したい。これと同義の語として「人心の騒乱」[『概略・緒言』]や「マインドの騒動」[1874年10月12日付馬場辰猪宛書簡]がある。『学問のすゝめ』13編[1874年12月]における「怨望」と「不平」、特に後者の「不平」は「人心の騒乱」と相互に密接な関係にあること、「不平」「不満」がエッカルトの著書に散見することなどから、福沢は『概略』執筆以前に、或いは『学問のすゝめ』執筆中、ないしはそれ以前に本書を通読していた可能性も考えられる。仮にそうであれば、『民情一新』の主題たる「近時の文明」と「人心騒擾」というテーマは、『概略』以後に形成されたのではなく、「原理論」執筆と同時に並行的に温められていたということも、充分考えられる。いずれもデアロウの域を越えない推理なので、今後の研究動向を注視したい)。

his journal was strictly prohibited, his name might not be mentioned, and his very existence was completely ignored by the government. The charm of this mystery contributed essentially to make Herzen's influence unassailable. In what manner, notwithstanding, the *Kolokol* passed the frontier in countless copies, reached every one's hands, and was read by every one from the emperor to the cabdriver, remains, to the present day, an unexplained enigma. That at the Nijni-Novgorod fair of 1859 alone, 100,000 copies, imported it was said from Asia, were confiscated; is sufficient to testify to the immense dissemination of this expensive journal. /the *Kolokol* contained correspondence from every end and corner of European and Asiatic Russia, the source of which was veiled in impenetrable ambiguity. /State-secrets, of which not ten persons in the empire dreamed, were treated by him as things of world-wide knowledge; /The dread of appearing in the *Kolokol* soon paralysed the hand of the boldest and hardened officials of the third rank in the Imperial service; /seventy seven large journals were entered between the years 1858 and 1860; of these fifty had been undertaken in Petersburg, seventeen in Moscow, and ten in various government cities. /In Petersburg, the rich Count Kuschelev-Besborodko established the weekly radical paper, the 'Russian Word' (*Russkoye Slovo*), endeavouring to engage the assistance of the most reputed writers by high remuneration (he paid 100 Rbl. a sheet); in Moscow, Professor Michail Katkov laid down his

academical office, in order to purchase a printing-house, and to publish the monthly journal, the 'Russ Messenger' *Russky-Vyestnik*. /No less considerable was the number of those who sought for office as censors: convinced as they were, that the watchers over the press must be above all men free from prejudice, liberal, and independent of the government; rich private individuals, and high pensioned officials, solicited these offices, which before had been little sought for, on account of their responsibility; /if it was proved that the one dismissed possessed no property, committees met together for his support. After Kruse, the favorite Moscow censor, had in this way become a wealthy man, liberalism became an epidemic among the officials of the censorship. Soon every limit to the periodical press ceased, and the journals vied with each other in radical boldness and polemical extravagance. (pp.42-43, 49-51.)

「遂に千八百六十一年二月に至て奴隸の法を廢したれども、此一挙を以て人心を鎮靜するに足らず。蓋し數百年來の旧慣を一時に變革したることなれば、奴主の不便利は固より論を俟〔ま〕たず、其放解せられたる奴輩も頓〔とみ〕に放たれたる籠の鳥の如く方向に迷ふて行く所を知らず、籠を出たるの自由は以て籠を奪はれたるの難澁を償ふに足らざればなり。又一方には是より先き、首府及び「モスコウ」辺に於て書生輩は多分書を読まずして唯雜誌新聞の論説のみを悦び、得々政治を談じ國事を議し、或は各処に集会し或は政府に建議し、其喧に堪へず。依て千八百六十一年五月文部卿「プーチャーチン」[旧海軍將官にて、近頃日本より帰り文部

卿に転任したる者] の立案にて新法を設け、大
 学校の謝金を増して毎半年に五十「ルーブル」
 と定め、以て其入校の道を塞ぎ、又生徒輩が私
 に社を結て同校の貧生を救助するため贖金を
 禁じ、其贖金を処分するため委員を選ぶを禁
 ずる等、様々に不自由なる新法を作て学者世界
 の物論を鎮圧せんと試みしかども、僅に半年に
 過ぎずして復た書生の騒擾を引起し、遂に数名
 の生徒を獄に下だすのみにして、文部卿の策も
 其功を奏するを得ず。」(『全』36-37頁、『選』
 295-296頁)

(管見するところ、エッカルトの原書には
 「籠の鳥」なる譬えが見つからない為、当該一
 文には、農奴解放に関する福沢の見解が示され
 ていると推される)。

The law of emancipation, passed on the
 19th February 1861, marks a new section in
 the history of the Russ monarchy tho' the
 revolution, in the political views of Russ
 society, dates back to the days of the Cri-
 mean war; /the liberal minister of educa-
 tion was obliged to retire, and his work de-
 volved on Admiral Count Putyatin, who
 had shortly before returned from Japan, a
 foolish fanatic of the retrograde party, and
 a bigoted admirer of the byzantine hierar-
 chy. /During the winter of 1860-1861,
 Putyatin had prepared a new law, which re-
 ceived Imperial confirmation, and was pub-
 lished in May- /All the freedom, hitherto
 really conceded to the students, had been
 taken from them by this law; to prevent
 the thronging of the masses to the universi-
 ties, the entrancefee was raised half-yearly
 to 50 silver Rubles. The students were for-
 bidden to hold meetings, to continue their
 fund, lately established, for the suport of

poor fellow-students, to choose deputies for
 the management of this fund; and so forth.
 /when on the following morning (25th Sep-
 tember) the university-buildings were closed
 contrary to agreement, and the tidings
 spread that the deputies and spokesmen of
 the student-party had been surprised in the
 night by gensd' armes, and had been thrown
 into prison. /Putyatin made the existing
 evil still worse, by playing the pasha with-
 out regard to the altered times, and treat-
 ing the university teachers with contempt
 and rudeness, compelling them even to re-
 sign their office. (p.64, pp.104-105, p.107,
 109.)

「事態の困難斯の如くなる其際に、「モスコウ」
 に一学士あり、名を「カトコフ」と云ふ。此人
 は積年英国の治風を悦び立憲政体の説を頻に称
 賛して稍や世に知られたる者なりしが、千八百
 六十二年夏の頃政府の内命を得て雑誌を発兌し、
 誌中公然筆を揮て「ヘルズン」の説を駁し、其
 過激を罪し其偏頗を咎め、首府の騒擾を醸して
 国安を害したる者は此亡命記者なりとて、憚る
 所もなく論破攻撃したりしに、世人も初は唯珍
 らしく之を読たるもの漸くして其論に服して、
 「コロコル」の名声も稍衰運に傾かんとする其
 際に、」(『全』37頁、『選』296頁)

The man who first had the courage and
 the judgment to request permission from
 the government to make an open and direct
 attack on Herzen, ranks now as one of the
 most influential public characters in Rus-
 sia: in the summer of 1862 he was a jour-
 nalist, whose name, it is true, was known
 pretty generally, but with whom the public
 were better acquainted from the caricature

in the Petersburg humorous papers, than from his solid and carefully written articles. Michail Nikoforovitch Katkov, formerly a professor of philosophy at the Moscava university, /and had been well known for his zeal for English institutions, and for a constitutional government; /In various journal-articles, lively, but written with decided skill, he had declared war against the hitherto all-powerful Dioscuri, Herzen and Ogarev; he had imputed to them participation in the disorders that had occurred in St. Petersburg; and had pointed out the influence of these emigrants as the main source of the radical errors which threatened the repose of the country, and disturbed the government in the progress of reform. At first the Russki Vyastnic was purchased only, /The ice therefore was broken; the magic power of the name of Herzen was deprived of its best support; ... of the infallibility of the programme promulgated in the Kolokol. (pp. 126-127.)

(カトコフの思想的立場とそのユニークな言論活動に、恐らく『概略』の著者は「殊更」興味を覚えたと思われる)。

「千八百六十六年四月四日、「モスコ」の書生「カラコソフ」なる者、短銃を以て国帝を狙撃して成らず、直に捕縛して之を糺問すれば、此者は貴族にも非ず又「ポーランド」の人にも非ずして魯国の顛〔転〕覆者流社会党の一人なり。抑も此社会党は近來魯の首府及び「モスコ」府に出現したるものにして、日耳曼及び「ポーランド」の人は之に関係することなし。其主義は元と仏蘭西より伝へ来りて、彼の「コロコル」の記者「ヘルズン」を以て巨魁と称すと雖〔い

え〕ども、純粹の党与は甚だ多からず、唯政府に向て衝撞するのみなりしが、千八百六十三年魯政府の暴威を以て「ポーランド」の反民を圧伏してより以来、この党与は固より其処置を悦ばず、乃〔すなわ〕ち心事を変じて他の自由党の中に混同し、其説に謂〔いえ〕らく、魯国の農産平均の説を以て先づ之を「ポーランド」の地方に施行したれば、遂には地主廢絶の事も實際に行はるゝことあらんとて、只管この一点に論鋒を向けたれども、社中過激の徒は其考の因循緩漫なるを悦ばずして別に一党与を結び、其説は人間社会在來の秩序をば悉皆顛覆廢絶するを以て主義と爲し、人の私有を無にし、国を無にし、寺院を無にし、婚姻の法を無にし、社会の交際を無にする等、一切万事人為の旧物を一掃せんとするの企望にして、此大望を成すには先づ国帝を殺戮〔さつりく〕して之を無にし、以て他に及さんとする者なり。其党類固より少なしと雖ども、其勢は極て猖狂〔しょうきょう〕なりと云ふ可し。之を「ニヒリスト」の党と云ふ。「ニヒリスト」とは虚無の義なり。蓋し此党類は世の中に如何なる事物をも採用せずして、唯在來のものを顛覆廢絶して以て愉快を覚る者なればなり。故に此虚無党と自由党と其性質を尋れば固より天淵の差あれども、其所見は自から相符合するの点なきを得ず。即ち貴族を貴て人の種族を分つを惡み、又は每人に財産を分て之を私するを惡む等の簡条は、自由党の常に主張する所にして、虚無党も之が爲に力を得たること多し。」(『全集』37-38頁、『選』296-297頁)

On the 4th April 1866, Vladimir Karakosov, a former Moscow student, discharged his pistol at the Tzar, as he was strolling in the summer garden, and it was soon proved that this man was no Pole and no aristocrat, but a socialist Russian democrat, and a member of a revolutionary

society, established in Moscow and in Petersburg; a society in which no German and no Pole was to be found. Since the year 1863, there have not been in Russia many of the adherents of the pure socialist principles imported from France, who had been led by Herzen; the bulk of the party had, as we know, at the outbreak of the Polish revolt, passed into the national democratic camp, had formed a new object for that love of destruction which had originally been directed against the government, in the contest against Polish and Catholic influence, and had satisfied its socialistic conscience with the consolation that the introduction of Russ peasant-communism in Poland and Lithuania would best prepare the way for the complete annihilation of personal property in the soil. The minority of decided socialists had yielded reluctantly to the pressure of circumstances only; left to themselves, they indulged in the conviction of the necessity of overturning all existing order; of annihilating property, state, church, marriage, society, &c., of placing communism instead of socialism on the throne, and of beginning this great work by the murder of the Tzar. This small, but fanatical party were called the 'Nihilists', because they would accept absolutely nothing, and only saw happiness in the destruction of everything existing. Between them and the above mentioned men of the national democratic party there lay a deep gulf; yet still there were not wanting points of contact: and that the hatred against the nobles, and against personal property, had

been increased by the democrats, is not to be denied. (p.166.)

(peasant-communism〔隷農共産主義〕と上記福沢の名訳に注目。「社会の交際」は society である。いささか妙なる点は、財産、国家、教会、婚姻、社会まで言及しながら、福沢が、Placing communism instead of socialism (on the throne)、社会主義に代えて共産主義を玉座に据える、の一句を、どの様な事情でか、触れていない点である。これを含めて別稿で考察を予定している)。

「右の如き事情なれば、政府は國中一切の自由党を擯斥して之を政敵と見做し、之を鎮静伏する為には保守専制の主義に力を尽くさざるを得ず。乃ち「シュワロフ」侯を以て警察長官と為し、凶徒「カラコソフ」及び其党類の吟味は「ムラビヨウ」侯に任じ、第一着に時の文部卿「ゴロフニン」を黜〔しりぞ〕けて之に代るに警察長官の親友「ホルストイ」を以てす。蓋し其趣意は、前の文部卿在職の間に普通学及び物理学を奨励して学者の便利を増し以て社会党虚無党の蔓延を致したりとの罪を以てなり。此他諸大臣の黜陟〔ちゅつちよく〕甚だ少なからずして、政府は全く保守主義の政府と為り、尚其翌月〔凶徒暴動の翌月即ち千八百六十六年五月なり〕国帝の詔を下だして、其大意に云く、近来社会党の陰謀を以て国民の権理私有及び宗教を害せんとする其企は、先般捕縛したる凶徒の暴動に由て事跡既に明白、其罪惡む可し、蓋し我政府の寛仁大度自主自由の旨を誤解したるものなり、今後国帝は益人民の権理私有を重んじ、国内の貴族を保護して旧物を守る可ければ、若しも此旨に戻て騒擾を醸す者あらば直に之を殲滅して赦すことなかる可し云々とて、次で「モスコ」出版の新聞紙を停刊し又廃止し、雑誌は唯「カトコフ」出版のもの〔「コロコル」

の反対説]のみ盛にして、政府の政略は依然として千八百七十年に至れり。」(『全』38-39頁、『選』297-298頁)」(『全』38-39頁、『逮』297-298頁)

This circumstance was sufficient to procure the conservative party the ascendancy for the moment. Count Shuvalov, a decided opponent to Milyutin, and governor-general of Livonia, Esthonia, and Curland, was appointed director-general of the secret (political) police, a few days after the attempt: the direction of the investigation with regard to Karakosov and his colleagues was consigned to Count Muravyev, who had been a decided enemy to Poland, and, indeed, the first Russianiser of Lithuania; /The first victim of his newly-obtained influence was Golovnin, the minister of education, an adherent of the Grand-duke Constantine; this statesman was reproached with having prepared the way for the dissemination of the communist and materialistic doctrines of Nihilism, by the favors he bestowed on the acquisition of general knowledge, and on the study of natural science; and he was replaced by the conservative Count Folstoy, a friend of Shuvalov's. /These personal changes, which quickly followed each other, soon received their authentic interpretation in an Imperial rescript of the 23rd May: Right, Property, and Religoin (it was said in this document, which was completely ignored by the western press, pre-occupied as it was at that time with the troubles of war) were heavily threatened by dangerous socialist intrigues, traces of which had been brought to light

by the late outrage; the liberal intentions of the government had been misunderstood: and the Emperor solemnly declared, that he perceived the necessity of the right of property, that he would support the conservative element of the state, the nobles especially, and would put down any agitation against them, let it proceed from whom it might. /This policy, and the influence of the democratic bureaucracy with Katkov at its head, have prevailed up to the present time. The sentence passed on the Moscow journal for its insubordination was personally rescinded by the Emperor, in June 1866; (pp.167-169.)

(「社会党虚無党の蔓延」の原文は、見られるように、the communist and materialistic doctrines [「共産主義的、唯物論的教説」]である)。

「右は魯国近世史中千八百七十年までの大略なり。其人心騒擾の端は「ニコラス」帝在位の時に開き、爾後人民の勢力と政府の勢力と相互に衝撞軋轢して一伸一縮其収局を知る可らず。千八百七十年以来も同様の形勢にして、政府の意の如くならず又人民の意の如くならず、衝撞は益甚しくして、本年四月も復た国帝に狙撃を試たる者ありしと云ふ。其国情推して知る可し。人民も政府も共に狼狽して方向に迷ふ者の如し。」(『全』39頁、『選』298頁)

[拙いノートながら、本年3月退職を迎えられる渡邊益男先生に、感謝の気持ち込めて、これを捧げたい。]

(ひぐち たつお、本学科教授)